

受賞作品

# 労働時間の経済分析

## —超高齢社会の働き方を展望する

山本勲・黒田祥子著

書評

日本経済新聞出版社 xviii,359 ページ、4600 円（税別）



### 効率的に非効率な仕事をする謎

国際基督教大学客員教授 八代尚宏

本書は、労働時間に関わる諸問題を網羅的にカバーしており、様々な仮説について、多くの個票データを有機的に結合し、詳細な分析を行った労作である。

日本の平均労働時間は長期的に短縮傾向にある。しかし、これはパートタイム労働者の増加という構成変化によるもので、フルタイム労働者の年間労働時間は、25 年前とほとんど変わっていない。週休 2 日制は普及したが、平日の労働時間は逆に増え、睡眠時間が減少するシワ寄せが生じていることも、著者は「社会生活基本調査」を用いて指摘している。

これは、時間当たりの労働生産性が経済協力開発機構（OECD）諸国中で日本が特に低いことの要因となっている。正規社員の平日労働の長時間化は、深夜サービスの需要を増やし、非正社員の深夜労働を増やしたとの分析も興味深い。

「日本人は働くことが好き」という通説がしばしば取り上げられる。しかし、これは、グローバル企業における日本人の欧州転勤者の労働時間は短く、勤務環境の内外の違いの影響が大きいという事実から明確に反証されている。従って、長時間労働の是正が長らく唱えられているにもかかわらず、是正されないのは、一定の経済合理性がそこには存在するからである。

日本企業にとって、雇用保障が必要な正規労働者への賃金が固定費に近い性格のものであることが、この問題を考える上では重要である。仕事量の増加に対して新規雇用を増やす欧米企業と比べ、日本企業の場合、既存の労働者に残業させ、割増賃金を支払う方が、賃金コストが低くなることを、本書は実証分析している。これが、多くの仕事に過度なサービスを要求する非効率が常態化していることのひとつの要因ともなっている。

それでは、時間に縛られない裁量労働制になればどうだろうか。著者の分析によると、転職が難しい状況では、労働者の交渉力は弱く、労働時間の短縮は難しいという。結局、雇用の流動化なしには、労働時間改革も進まないのである。こうした日本人の働き方を変え、ワーク・ライフ・バランスやメンタルヘルスの改善を図ることで、労働生産性を向上させる可能性があることなど、本書の中には政策的にも重要な分析がいくつも盛り込まれている。

2 人の著者は共に、日本銀行出身だが、「効率的に非効率な仕事をする」という日本企業の働き方の研究は、果たして彼らの実体験に基づくものだろうか。